

ユスト高山右近列福に向けて

大阪教区高山右近列福運動推進委員会 委員長 川邨裕明神父

日本の司教団は、2010年2月の臨時司教総会において、ユスト高山右近を殉教者として列福するため運動を進めると決定しました。その決定に従って、列聖列福特別委員会(委員長 溝部脩司教)は、列福に向けた調査書の見直しなど具体的な作業に入っています。列福運動を支え成功に導くために最も大切なことは、高山右近が生活し活動した地域の教会が、熱心に列福を願うことです。

列福推進委員会 立ち上げ

大阪教区では、池長潤大司教が教区内の列福に向けた機運を盛り上げるために、列福運動推進委員会を立ち上げることを決定されました。それを受けて委員会は、運動のための下準備ともいえる体制づくりに着手しました。北摂地区や列福運動を支えるために必要なメンバーの人選を行い、さまざまな取り組みを始める準備を進めています。この委員会の構成は流動的で、運動の推移とともに委員の顔ぶれも変化していくことでは

会像に対して、大きなヒントと励ましを与えてくれるように感じます。

高山右近と5つの教会像

新生計画で示された、大阪教区が目指す教会像は、①「谷間」に置かれた人びとの心を生きる教会、②「交わり」の教会、③共同責任を担い合い、協働する教会、④聖霊の導きを識別しながらともに歩む教会、⑤司祭、修道者との協力を重視しながら、信徒の役割と責任(使命)を前面に出す教会です。

高山右近の人生をこの5つの教会像に照らしてみても、多くの部分で重なるように思われるのです。高山右近は、父ダリヨ高山飛騨守とともにミゼリコルヂヤ(慈悲)の組を結成し、貧しい民の救済を行い、無名のキリシタンの葬儀においてその棺を担ったとの記録があります。高槻の地に、①谷間に置かれた人々の心を生きる教会を生み出



を進めたいと願っています。

列福運動の視点

日本の教会としての高山右近列福運動の視点は、列聖列福特別委員会から提案され、冊子などにまとめられることでしょうか。それは別に、大阪教区独自に高山右近の人物像や行跡を検討して、教区の歩みとの

仰と現実に板挟みになりながら、どのように生きるか究極の選択を迫られ、苦悩や挫折を体験しながらも祈りの中で信仰を高めていったという側面を大切にしたいと思います。その側面からみると、高山右近の生きざまは、大阪教区の新生計画、とりわけ大阪教区が目指す5つの教

うと尽力していました。高山右近はキリシタンの大檀那と呼ばれるとおり、どこで暮らしていても信仰を説き、人びとを教会へと招きました。また、洗礼を受けた信徒がミサや秘跡に参加できるように配慮しました。そればかりでなく、日本の教会全体のことを考えて働き、②交わりの教会を体現したのです。高山右近は、信徒のリーダーとして教会の建設や発展に貢献しましたが、宣教師との協働も大切にしました。しかし、日本の教会全体を考える立場から、秀吉の時代、宣教師たちが政治にも口出しをして教会弾圧の思いを秀吉に抱かせたとき、宣教師たちをいさめに行ったのです。そのことをとおして③共同責任を果たそうとしました。

信長の時代、高山右近の国主荒木村重が信長に対して反旗を翻したとき、信長はオルガンチノ神父を派遣し右近に降伏を勧めると同時に、もし従わなければ教会を破滅させると脅迫したのです。一方、村重は信長側に付くなら人質として預かって3歳の一人息子と妹を殺害すると脅してきました。さらに、父ダリヨまでが、村重を裏切るなら切腹すると言いつつ、信長にも村重にも従うことのできない窮地へと追いやられてしまったのです。

その時、右近は祈りの中である決断を下して、実行したのです。その決断とは、領主権を父に返し、自分は信長のもとに下り高槻城と教会の保証を願ひ、信長に受け入れられれば教会の奉仕に身をささげ、受け入れられなければ殉教の道を歩もうと覚悟したのでした。それは④聖霊の導きによる識別であったのです。武器を降ろし、紙衣だけになり髪をおろした右近を信長は受け入れました。高山右近は⑤信徒の役割を全面的に果たして、信仰を捨てることなくすべてを失ったのち、マニラへと追放されました。殉教の道を最後まで走り通したのです。

今後、歴史研究者の助けを求めながら、大阪教区としての高山右近の再評価を行いつつ、列福運動を盛り上げたいと思います。委員会では、列福運動に汗を流してくださる方、企画や提案なども同時に募りたいと思います。どうか、窓口となる教区本部事務局企画広報課まで情報をお寄せください。